

身近なまちの風景物語(36)

つなぐ備え

最近、とみに見かけなくなった。というより、探すことがなくなったので、気づかないのかもしれない。

財布の中からテレホンカードが消えたのはいつからだろう。十円玉をいっぱい握りしめて公衆電話に向かった経験を話す機会もなくなった。

かつての駅はさまざまな情報が行き交う媒介の場でもあった。

改札口で、ホームで、駅員の声が乗客を誘導した。案内板を見ながらホームを探し、乗り換えを急いだ。雑踏をかき分け、黄色の表示を頼りに出口に向かった。

伝言板があった。黒板やホワイトボードに書き込んで連絡を取り合った。暗号や記号、当事者しかわからない書き方や書き込みが、それを目にする者の想像を掻き立てた。時には社会へのメッセージに心を痛め、よくできた似顔絵に微笑んだ。

駅前には郵便ポストがある。通学や通勤の途中で、郵便物を投函した。それが届くまでの数日間は胸をときめかせ、その返信を待ちわびた。投函口に手を入れては戻し、なかなか決断できなかった時のことや、

ポストの前で手を合わせた時のことも思い出す。

公衆電話もあった。急なドシャ降りて親に迎えを頼む高校生、待ち合わせに来ない友人に連絡する若者をよく目にした。事故で電車の運転が見合わせになると、勤務先や取引先に電話するサラリーマンが長蛇の列をつくった。

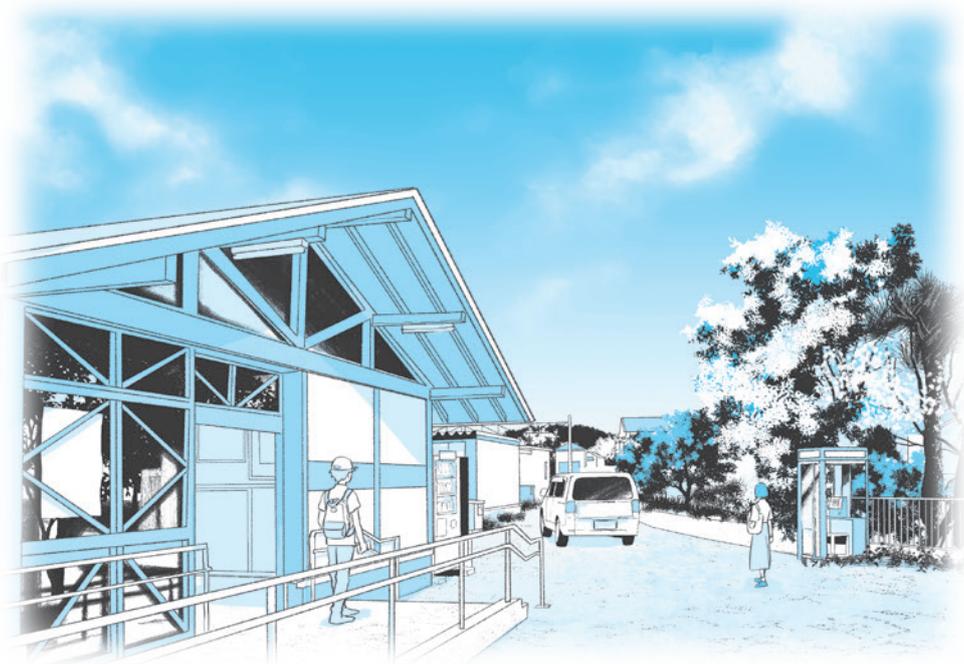
携帯電話の普及で、こうした駅前の風物詩がすっかり姿を消した。ただ使用頻度は減っても郵便ポストや公衆電話はなくなる。生活の大切なインフラだ。

公衆電話はその数こそ減っているが、法令で最低限の数は確保されている。大地震など災害時には、携帯電話が繋がらなくても公衆電話が通じたことを、わたしたちは経験的に知っている。停電時でも使用可能だ。

いざという時の備えのため、日常の生活圏で公衆電話の場所を確認しておきたい。子どもにはその使い方を教える必要もありそうだ。親子で、家族で実見することは一考に値する。

野中 勝利

筑波大学 大学執行役員 芸術系長 教授



挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程2年）